

## めがじいの老老介護

柏原中学校 一年 余田 優月

めがじいというのは、私のおじいちゃんのお兄さんのことだ。

「じいちゃんともう一人じいちゃんがおって分かりにくいから兄貴は『めがじい』やじよ。」

子どもには分かりにくい、似たような年のおじいちゃんが二人いることを説明しやすいように、おじいちゃんが「めがじい」という呼び方を発明した。めがねをかけたおじいちゃんだからめがじいなのだ。

めがじいはある時から、夜でも自動音声で対応してくれる ATM に行つて、お金をおろすはいかい行動を何度もするようになった。これが認知症の始まりだった。

ある日、日が暮れてから遠くまで出かけためがじいが歩けなくなって歩道にうずくまっていたところを警察の方に発見されるという事件が起きた。この事件から、おじいちゃんのおじいちゃんによるめがじいのための老老介護が始まった。

朝起こしに行き、朝食の準備をし、昼間は店の仕事をしながら食事やトイレの介護、体をふいたり、洗濯や掃除をしたりする。夕食の片付けをし、ベッドに入ったのを確認してからようやく家に帰ってくる。事件が起きたのが、お姉ちゃんが保育園に通い始めるのと同じ頃だったそうで、朝と夕方の保育園バスの送迎もおじいちゃんの仕事になっていた。自営業のおじいちゃん以外みんな仕事があり、めがじいの介護ができなかった。そんな訳で、「兄貴の面倒をおかあちゃんに見せることだけは、ようせん。」

と言って、食事を作る以外のすべての介護を一人続けていたらしい。見かねたお母さんがめがじいを病院に連れて行ったときに出た認定は「要介護Ⅲ。」すぐケアマネさんが来て、めがじいのグループホーム入所が決まった。

私は家にいるめがじいを知らない。私が生まれたときには、ホームに入所していたからだ。入所してからは、お母さんがおじいちゃんとおばあちゃんを車に乗せて面会に行っていた。私も保育園のころからよく一緒に連れて行ってもらった。

私が知っているめがじいは、ホームの個室ベッドで寝ているか、車いすに座つて大画面のテレビで時代劇を見ている姿くらいだ。ホームには、めがじいのような認知症のお年寄りが何人かおられて、私がいさつをすると、拍手して喜んでくれた。リクエストされて、保育園で歌っている歌を歌ったら、涙をながして握手したり、一生懸命仕上げたぬり絵をくれたりした。みんな楽しそうに過ごされ

ていた。帰るときにはいつもおじいちゃんめがじいに

「用事ないこ？ほしいもんないこ？おってん人のゆうこと、よう聞いて、がいようおるんやじよ。」

と言っていた。めがじいはいつも声にならない声で、

「ない。」

とってうなずき、お寺の仏さんみたいに手を振っていた。

おじいちゃんの口ぐせは「兄貴より先に死なれへん。」だった。でも、病気で私が五才のときにめがじいのことを気にしながら亡くなった。それから七年、おじいちゃんのかわりにおばあちゃんとお母さんが月に一回は必ずホームに行っていた。私も何度か一緒に行った。もちろん、おじいちゃんが亡くなったことは伝えずに。

めがじいは亡くなるその日の朝まで、快適な環境に整えられたホームで十三年間一人ぼっちになることなく過ごせた。お葬式の日も、自治会の方が送りに来てくださったり、霊きゆう車が通る時間に合わせて道で手を合わせてくださったりした。長い間ホームにいたから、地域の人から忘れられていてもおかしくないのに、めがじいは、たくさんの人に見守られて旅立つことができた。介護されてきつと幸せだったと思う。

私が考えた問題点は、おじいちゃんが周囲に迷惑をかけたくないという遠慮と優しさから一人で介護をがんばってしまったことだ。頼ることを申し訳ない、と思っていたことだ。おじいちゃんは死ぬまで、「兄貴、兄貴」と独身で自分しか家族がいないめがじいのことを気にかけて続けた。おじいちゃんにはいつも近くに家族がいたけれど、ずっと遠慮して気を使って、介護の大変さを知っていただけに助けてと言えなかったのかもしれない。

人に頼ることは決して迷惑ではないと今ならおじいちゃんに言える。頼る勇気を持つことで、みんなが気持ちに余裕が持て、相手に対して優しくなれると思う。また、おじいちゃんみたいに助けを求められていない人はいないかと気にかけることはできないだろうか。

私にできることは、地域の方にしっかりあいさつをし、元気を届けることだ。そういえば、おじいちゃんにおはよう、と言うと、いきいきした笑顔であいさつしてくれた。今日もあいさつでみんなに元気を届けたいと思う。